

第 67 回神奈川建築コンクール 住宅部門 最優秀作品選評

「本郷台の家」

審査委員：古賀 紀江

本年度の最優秀賞は、子供を育て上げた夫婦二人が暮らす住宅である。

206.67 m²の敷地に建つ、建築面積 60.31 m²の建物である。周囲には擁壁を抱える家々が建ち並ぶ横浜らしい住宅地に立地する。30%に満たない建蔽率はウッドショックによる資材高騰の影響から当初の計画が見直され、建築面積が必要最低限に抑えられたことによる。実は、この変更こそが、この建物の創造の源である。建物の規模の変更によりもたらされた外部空間は、建築家と、そして建築家と共に計画に打ち込んだ住まい手やその家族に「傾斜地における内外の空間的なつながり」というテーマを与えた。そして、建築家と住まい手はそれを見事に解いて本作品を創り上げた。

本計画では、住宅の建設にあたり敷地の擁壁を取り払い、敷地を元来の傾斜地に戻すことをしている。30%の建蔽率のゆとりと傾斜地が建物の周囲に生み出した庭空間を時に内部に呼び込みながら、有機的に連携する場が作りこまれた住まいとなった。計画の際、建築家と住まい手たちは平面の部屋の連なりで建物を考えるのではなく「空間」で住まいを構成するという手法に導かれたという。玄関から和室、庭空間と絶妙にリンクした「趣味の」駐車場、寝室と書斎、2階のリビング、ダイニングへと「渦巻き状」に空間が組まれている。ここで秀逸なのは一つ一つの空間に暮らしの「場」が丁寧に計画された点である。「空間」は暮らしの「場」を擁するボリュームとして、時に高さを変えて、注意深く連ねられた。その結果得られたシークエンスやそこに居る人々による「視線」の交錯は、このコンパクトな建物に良い意味での複雑性をもたらしたのである。例えば「空間」を組んだ先に生まれた小さな三角形の吹き抜けは書斎と居間に居る人を時にリアルに、時に感覚的に繋ぐ。この 3 次元のつながりは建物の規模感を豊かな楽しみに満ちたものことに貢献している。

元来の傾斜にもどされた敷地の緑は町に馴染み、近隣住民と顔を合わせる機会も作っていると。この家の庭は時に「渦巻き」に取り込まれ、時に地域社会との接面となる。

端正な姿のこの住宅は、骨太の計画手法を発見し、具現化して見せたというもう一つの大きな意味を持つ作品である。